

東海道五十三次

岡本かの子

青空文庫

風俗史専攻の主人が、殊ことに昔の旅行の風俗や習慣に興味を向けて、東海道に探査の足を踏み出したのはまだ大正も初めの一高の生徒時代だったという。私はその時分のことは知らないが大学時代の主人が屢しばしば々そこへ行くことは確たしかに見ていたし、一度などは私も一緒に連れて行って貰もらった。念の爲め主人と私の関係を話して置くと、私の父は幼時に維新の匆そつそつ騷そうを越えて来たアマチュアの有職故実家ゆうそくこじつであったが、斯道しどに熱心で、研究の手傳てだすけのため一人娘の私に絵画を習わせた。私は十六七の頃にはもう濃く鑿水どうせきをひいた薄美濃紙を宛あてがって絵巻物の断片を瞻すき写しすることも出来たし、残存の兜かぶとの鏝ころを、比較を間違えず写生することも出来た。だが、自分の独創で何か一枚画を描いてみようとなるとそれは出来なかつた。

主人は父の邸やしきへ出入りする唯一の青年といつてよかつた。他に父が交際している人も無いことはなかつたが、みな中年以上か老人であつた。その頃は「成功」なぞという言葉が特に取出されて流行し、娘たちはハイカラ鬚まげという洋髪を結ゆっている時代で虫食いの凶書遺品あやを漁あるといふのはよくよく向きの變つた青年に違ちがひなかつた。けれども父は

「近頃、珍らしい感心な青年だ」と褒ほめた。

主人は地方の零落した旧家の三男で、学途には就いたものの、学費の半以上は自分で都合しなければならなかった。主人は、好きな道を役立てて歌舞伎の小道具方の相談相手になり、デパートの飾人形の衣裳を考証してやったり、それ等から得る多少の報酬で学費を補っていた。かなり生活は苦しうだったが、服装はきちんとしていた。

「折角の学問の才を切れ端にして使い散らさないように——」

と始終忠告していた父が、その実意からしても死ぬ少し前、主人を養子に引取って永年苦心の蒐集品と、助手の私を主人に譲ったのは道理である。

私が主人に連れられて東海道を始めてみたのは結婚の相談が纏まって間もない頃である。今まで友だち附合いの青年を、急に夫として眺めることは少し窮屈で擦ばゆい気もしたが、私には前から幾分そういう予感が無いわけでもなかった。狭い職分や交際範囲の中に同じような空気を呼吸して来た若い男女が、どのみち一組になりそうなことは池の中の魚のように本能的に感じられるものである。私は照れるようなこともなく言葉もそう改めず、この旅でも、ただ身のまわりの世話ぐらいは少し遠慮を除けてしてあげるぐらいなものであった。

私たちは静岡駅で夜行汽車を降りた。すぐ駅の俵を雇って町中を曳かれて行くと、ほの

ぼの明けの靄もやの中から大きな山葵漬わさびの看板や鯛たいのでんぶの看板がのそつと額の上に現われて来る。旅慣れない私はこころの弾はずむ思いがあつた。

まだ、戸の閉つてゐる二軒のあべ川餅屋もちやの前を通ると直ぐ川瀬の音に狭霧さぎりを立てて安倍川が流れている。轍わだちに踏まれて躍る橋板の上を曳かれて行くと、夜行で寝不足の瞼まぶたが涼しく拭われる気持がする。

町ともつかず村ともつかない鄙ひなびた家並がある。ここは重衡しげひらの東下りのとき、鎌倉で重衡に愛された遊女せんじゆ千手の前の生れた手越たしの里だという。重衡、斬られて後、千手は尼となつて善光寺に入り、歿したときは二十四歳。こういう由緒を簡単に、主人は前の俵から話し送つて呉れる。そういえば山門を向き合つて双方、名灸きゆうしよ所と札をかけている寺など何となく古雅なものに見られるような気がして来た私は、氣を利きかして距離を縮めてゆるゆる走つて呉れる俵の上から訊きく。

「むかしの遊女はよく貞操的な恋愛をしたんですわね」

「みんなが、みんなそうでもあるまいが、——その時分に貴賓きひんの前に出るような遊女になると相当生活の独立性が保てたし、一つは年齢の若い遊女にそういうロマンスが多いですね」

「じゃ、千手もまだ重衡の薄倖はつこうな運命に同情できるみずみずしい情緒のある年頃だったというわけね」

「それにね、当時の鎌倉というものは新興都市には違いないが、何といっても田舎で文化に就つては何かと京都をあがれている。三代の实朝さねとも時代になつてもまだそんなふうだったから、この時代の鎌倉の千手の前が都会風の洗練された若い公達きんだちに会つて参つたのだらうし、多少はそういう公達を恋の目標にすることに自分自身誇りを感じたのじゃないでしょうか」

私はもう一度、何となく手越の里を振返つた。

私と主人はこういう情愛に關係する話はお互いの間は勿論もちろん、現代の出来事を話題としても決して話したことはない。そういうことに触れるのは私たちのような好古家の古典的な家庭の空気を吸つて来たものに取つては、生々しくて、或る程度の嫌味にさえ感じた。ただ歴史の事柄を通しては、こういう風にたまには語り合うことはあつた。それが二人の間に幾らか温かい親しみを感じさせた。

如何いかにも街道という感じのする古木の松並木が続く。それが尽きるとぱつと明るくなつて、丸い丘が幾つも在る間の開けた田畑の中の道を俵は速力を出した。小さい流れに板橋

の架かっている橋のたもとの右側に茶店風の藁屋わらやの前で俵は梶棒おろを卸した。

「はい。丸子へ参りました」

なるほど障子しょうじに名物とろろ汁、と書いてある。

「腹が減ったでしょう。ちよつと待つてらっしゃい」

そういつて主人は障子を開けて中へ入った。

それは多分、四月も末か、五月に入つたとしたら、まだいくらかも経たない時分と記憶する。

静岡辺は暖かいからというので私は薄着の綿入れで写生帳とコートは手に持っていた。

そこから辺りにやしおの花あざやかが鮮あざやかに咲き、丸味のある丘には一面茶の木が鶯うぐいすもち餅もちを並べたように萌黄もへぎの新芽で装われ、大気の中にまでほのぼのとした匂いを漂わしていた。

私たちは奥座敷といつても奈良漬色の畳にがたがた障子の嵌はまっている部屋で永い間とろろ汁が出来るのを待たされた。少し細目に開けた障子の隙間から畑を越して平凡な裏山が覗かれる。老鶯ろうおうが鳴く。丸子の宿の名物とろろ汁の店といつてももうそれを食べる人は少ないので、店はただの腰掛け飯屋になつてゐるらしく耕地測量の一行らしい器械たずさを携たずさえた三四名と、表に馬を繋いだ馬子まごとが、消し残しの朝の電燈の下で高笑いを混えながら食

事をしている。

主人は私に退屈させまいとして懐ふところから東海道分間図ぶんま絵を出して頁をへぐって説明して呉れたりした。地図と鳥瞰図ちようかんずの合の子のようなもので、平面的に書き込んである里程や距離を胸に入れながら、自分の立つ位置から右に左に見ゆる見当のまま、山や神社仏閣や城が、およそその見ゆる形に側面の略図を描いてある。勿論、改良美濃紙の復刻本であったが、原図の菱川ひしかわもろのぶ師宣のあの暢ちようえん艶おとむぎで素雅な趣はちりちり味えた。しかし、自然の実感というものは全くなかった。

「昔の人間は必要から直接に発明したから、こんな便利で面白いものが出来たんですね。つまり観念的な理窟に義理立てしなかったから——今でもこういうものを作ったら便利だと思うんだが」

はじめ、かなり私への心こころづか遣いで話しかけているつもりでも、いつの間にか自分独りだけで古典思慕に入り込んだ独り言ひとごとになつてゐる。好古家の学者に有り勝ちなこの癖を始終私は父に見ているのであまり怪しまなかつたけれども、二人で始めての旅で、殊にこういう場所で待たされつつあるときの相手の態度としては、寂しいものがあつた。私は気を紛まぎらすために障子を少し開けひろげた。

午前の陽は流石さすがに眩まぶしく美しかった。老婢が「とろろ汁が出来ました」と運んで来た。別に変った作り方でもなかったが、炊たき立ての麦飯の香ばしい湯気に神仙の土のような匂いのする自然薯じねんじよは落ち付いたおいしさがあつた。私は香りを消さぬように薬味の青海苔のりを撒ふらずに椀わんを重ねた。

主人は給仕をする老婢に「皆川老人は」「ふじのや連は」「齒磨き屋は」「彦七は」と妙なことを訊きき出した。老婢はそれに対して、消息を知っているのもあるし知らないのもあつた。話の様子では、この街道を通りつけの諸職業の旅人であるらしかった。主人が「作樂井さくらいさんは」と訊くと

「あら、いま、さきがた、この前を通つて行かれました。あなた等も峠とうげへかかられるなら、どこかでお逢いになりましょう」

と答えた。主人は

「峠へかかるにはかかるが、廻り道をするから——なに、それに別に会い度たいというわけでもないし」

と話を打ち切つた。

私たちが店を出るときに、主人は私に「この東海道には東海道人種とでも名付くべき面

白い人間が沢山たくさんいるんですよ」と説明を補足した。

細道の左右に叢々たる竹藪が多くなつてやがて、二つの小峯が目近く聳そびえ出した。天柱山に吐月峰とげつぼうというのだと主人が説明した。私の父は潔癖家で、毎朝、自分の使うたばこぼ蓆としいし盆ぼんの灰吹を私に掃除させるのに、灰吹の筒の口に素地きじの目が新しく肌を現すまで砥石としいしの裏に何度も水を流しては擦すらせた。朝の早い父親は、私が眠い目を我慢して砥石で擦すつて持つて行く灰吹を、座敷に坐り煙管きせるを膝に構えたまま、黙つて待つてゐる。私は気が気でなく急いで持つて行くと、父は眉を皺しわめて、私に戻す。私はまた擦り直す。その時逆にした灰吹の口に近く指に当たるところに磨滅した烙らくいん印で吐月峰と捺おしてあるのがいつも眼についた。春の陽ざしが麗うららかに拡がった空のような色をした竹の皮膚にのんきに据すわつてゐるこの意味の判らない書体を不機嫌な私は憎らしく思った。

灰吹の口が奇麗に擦れて父の氣に入つたときは、父は有難うと言ってそれを蓆盆にさし込み、煙管くゆを燻くゆらしながら言つた。

「おかげでおいしい朝の煙草が一服吸える」

父はそこで私に珍らしく微笑ほほえみかけるのであつた。

母の歿したのは男の手一つで女中や婆あやや書生を使い、私を育てて来た父には生甲いきぎ

斐^がとして考証詮索の楽しみ以外には無いように見えたが、やはり寂しいらしかった。だが、情愛の発露の道知らない昔人はどうにも仕方なかったらしい。掃き浄めた朝の座敷で幽閑雅な気分に入る。それが唯一の自分の心を開く道で、この機会に於てのみ娘に対して素直な愛情を示す微笑も洩^もらせた。私は物ごころついてから父を憐れなものに思い出して来て、出来るだけ灰吹を奇麗に掃除してあげることに努めた。そして灰吹に烙印してある吐月峰という文字にも、何かそういつた憐れな人間の息抜きをする意味のものが含まれているのではないかと思うようになった。

父は私と主人との結婚話が決まると、その日から灰吹掃除を書生に代ってやらせた。私は物足らなく感じて「してあげますわ」と言っても「まあいい」と言っただけでもやらせなかった。参考の写生や縮写もやらせなくなった。恐らく、娘はもう養子のもので譲つた気持ちからであろう。私は昔風な父のあまりに律儀な意地強さにちよつと暗^{あん}涙^{なみ}を催したのであった。

まわりの円味^{ちく}がかつた平凡な地形に対して天柱山と吐月峰は突^{とつ}兀^{こつ}として秀でている。けれども壘^{ちく}とか峻^{しゆん}とかい^そ峙^{ばだ}ちようではなく、どこまでも撫^なで肩^{がた}の柔かい線である。この

不自然さが二峰を人工の庭の山のように見せ、その下のところに在る藁葺の草堂わらぶき諸共もろとも、一幅の絵になつて段々近づいて来る。

柴の門を入ると瀟洒しょうしゃとした庭があつて、寺と茶室と折衷せつちゆうしたような家の入口にさびた聯れんがかかつている。聯の句は

幾若葉はやし初の園の竹

山桜思ふ色添ふ霞かすみかな

主人は案内を知つていると見え、柴折戸しおりどを開けて中庭へ私を導き、そこから声をかけながら庵いおりの中に入った。一室には灰吹を造りつつある道具や竹材が散らばつているだけで人はいなかつた。

主人は関わずに中へ通り、棚に並べてある宝物に向つて、私にこれを写生しとき給えと命じた。それは一休の持つたという鉄鉢てつぱつと、頓阿弥とんあみの作つたという人丸の木像であつた。私が、矢立やたての筆を動かしていると、主人はそこらに転がっていた出来損じの新らしい灰吹を持つて来て巻煙草を燻らしながら、ぽつぽつ話をする。

この庵の創始者の宗長そうちやうは、連歌は宗祇そうぎの弟子で禅は一休に学んだというが、連歌師としての方が有名である。もと、これから三つ上の宿の島田の生れなので、晩年、斎藤加

賀守の庇護を受け、京から東に移った。そしてここに住みついた。庭は銀閣寺のものを小規模ながら写してあるといった。

「室町も末になつて、乱世の間に連歌なんという閑文字が弄ばれたということも面白いことですが、これが東国の武士の間に流行つたのは妙ですよ。都から連歌師が下つて来ると、最寄々の城から招いて連歌一座所望したいとか、発句一首ぜひとか、而もそれがあす合戦に出かける前日に城内から所望されたなどという連歌師の書いた旅行記がありますよ。日本人は風雅に対して何か特別の魂を持つてるんじゃないかな」

連歌師の中にはまた職掌を利用して京都方面から関東へのスパイや連絡係を勤めたものもあつたというから幾分その方の用事もあつたには違いないが、太田道灌はじめ東国の城主たちは熱心な風雅擁護者で、従つて東海道の風物はかなり連歌師の文章で当時の状況が遺されていと主人は語つた。

私はそれよりも宗長という連歌師が東国の広漠たる自然の中に下つてもなお廃残の京都の文化を忘れ兼ね、やつとこの上方の自然に似た二つの小峰を見つけ出してその蔭に小さな蝸牛のような生活を営んだことを考えてみた。少女の未練のようなものを感じていじらしかった。で、立去り際にもう一度、銀閣寺うつしという庭から天柱、吐月の二峰

をよく眺め上げようと思つた。

主人は新しい灰吹の中へなにかの志の金を入れて、工作部屋の入口の敷居に置き「万事灰吹で間に合せて行く。これが禅とか風雅というものかな」

と言つて笑つた。

「さあ、これからが宇津の谷峠。業平の、駿河なるうつの山辺のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり、あの昔の宇都の山ですね。登りは少し骨が折れましょう。持ちものはこつちへお出しなさい。持つててあげますから」

鉄道の隧道が通つていて、折柄、通りかかった汽車に一度現代の煙を吐きかけられた以後は、全く時代とは絶縁された峠の旧道である。左右から木立の茂つた山の崖裾の間をくねつて通つて行く道は、ときどき梢の葉の密閉を受け、行手が小暗くなる。そういうところへ来ると空気はひやりとして、右側に趨つてゐる瀬川の音が急に音を高めて来る。何とも知れない鳥の音が、瀬戸物の破片を擦り合すような鋭い叫声を立てている。

私は芝居で見る黙阿弥作の「蔦紅葉宇都谷峠」のあの文弥殺しの場面を憶い起して、婚約中の男女の初旅にしては主人はあまりに甘くない舞台を選んだものだ。私は少し脅えながら主人のあとについて行つた。

主人はときどき立停まって「これどきなさい」と洋傘で弾ねている。大きな臺がまが横腹の辺に朽葉を貼りつけて眼の先に蹲うずくまっている。私は脅えの中にも主人がこの旧峠道にかかつてから別人のように快活になつて顔も生々して来たのに氣付かないわけには行かなかつた。洋傘を振り腕を払げて手に触れる熊笹むしを巻むしつて行く。それは少年のような身軽さでもあり、自分の持地に入つた園主のような氣儘きままさでもある。そしてときどき私に

「いいでしょう、東海道は」

と同感を強いた。私は

「まあね」と答えるより仕方がなかつた。

ふと、私は古典に浸る人間には、どこかその中からロマンチックなものを求める本能があるのではあるまいかなど考えた。あんまり突如として入つた別天地に私は草臥くたひれるのも忘れて、ただ、せつせと主人について歩いて行くうちどのくらいいたつたか、ここが峠だという展望のある平地へ出て、家が二三軒ある。

「十団子とおだんごも小粒になりぬ秋の風という許きよろく六の句にあるその十団子とおだんごを、もとの辺で売つてたのだが」

主人はそう言いながら、一軒の駄菓子ものを並べて草鞋わらじなど吊つてある店先へ私を休ま

せた。

私たちがおかみさんの運んで来た渋茶を飲んでみると、古障子を開けて呉^ご紹^ろの羽織を着た中老の男が出て来て声をかけた。

「いよう、珍らしいところで逢った」

「や、作樂^{さくらい}井さんか、まだこの辺にいたのかね。もつとも、さつき丸子では峠にかかつているとは聞いたが」

と主人は^{こた}応える。

「坂の途中で、江尻へ忘れて来た仕事のこと思い出してさ。帰らなきやなるまい。いま、奥で一ぱい飲みながら考えていたところさ」

中老の男はじろじろ私を見るので主人は正直に私の身元を紹介した。中老の男は私には^{ていねい}丁寧^に

「自分も絵の端くれを描きますが、いや、その他、何やかや八百屋でして」

男はちよつと軒端^{のきば}から空を見上げたが

「どうだ、日もまだ丁度ぐらいだ。奥で僕と一ぱいやってかんかね。昼飯も食うてつたらどうです」

と案内顔に奥へ入りかけた。主人は青年ながら家で父と晩酌を飲む口なので、私の顔をちよつと見た。私は作楽井というこの男の人なつかしそうな眼元を見ると、反対するのが悪いような気がしたので

「私は構いませんわ」と言った。

粗壁の田舎家の奥座敷で主人と中老の男の盃の献酬がはじまる。裏の障子を開けた外は重なつた峯の岨そぼが見開きになつて、その間から遠州の平野が見晴せるのだろうが濃い霞がよと濺んでかかり、金色にやや透けているのは菜の花畑らしい。覗きに来る子供を叱りながらおかみさんがあっせん旋する。私はどこまで旧時代の底に沈ませられて行くか多少の不安と同時に、これより落着きようもない静な気分むに魅せられて、傍でゆ茹で卵など剥むいていた。

「この間、島田で、大井川の川越しに使つた蓮台を持つてゐる家を見付けた。あんたに逢つたら教えて上げようと思つて——」

それから、酒店のしるしとして古風に杉の玉を軒に吊っている家が、まだ一軒石部の宿に残つてゐることやら、お伊勢参りの風俗や道中唄なら関の宿の古老に頼めば知つていて教えて呉れることだの、主人の研究の資料になりそうなことを助言していたが、私の退屈にも気を配つたと見え

「奥さん、この東海道というところは一度や二度来てみるのは珍らしくて目保養にもなっていないですが、うっかり嵌り込んだら抜けられませぬ。気をつけなさいまし」

嵌り込んだら最後、まるで飴にかかった蟻のようになるのであると言った。

「そう言つちや悪いが、御主人なぞもだいぶ足を粘り取られてる方だが」

酒は好きだがそう強くない性質らしく、男は赭い顔に何となく感情を流露さす声になつた。

「この東海道というものは山や川や海がうまく配置され、それに宿々がいい工合な距離に在つて、景色からいつても旅の面白味からいつても滅多に無い道筋だと思つたのですが、しかしそれより自分は五十三次が出来た慶長頃から、つまり二百七十年ばかりの間に幾百万人の通つた人間が、旅というもので管める寂しみや幾らかの気散じや、そういつたものが街道の土にも松並木にも宿々の家にも浸み込んであるものがある。その味が自分たちのような、情味に脆い性質の人間を痺らせるのだらうと思ひますよ」

強いて同感を求めるような語気でもないから、私は何とも返事しようがない気持をただ微笑に現して頷いてだけいた。すると作楽井は独り感に入つたように首を振つて

「御主人は、よく知つてらつしやるが、考えてみれば自分なぞは——」

と言つて、身の上話を始めるのであつた。

家は小田原在に在る穀物商で、妻も娶りめと兄妹三四人の子供もできたのだが、三十四の歳にふと商用で東海道へ足を踏み出したのが病みつきであつた。それから、家に腰が落着かなくなつた。この宿を朝立ちして、晩はあの宿に着こう。その間の孤独で動いて行く氣持、前に発たつた宿には生涯二度と戻るときはなく、行き着く先の宿は自分の目的の唯一のものに思われる。およそ旅というものにはこうした氣持は附きものだが、この東海道ほどその感を深くさせる道筋はないと言うのである。それは何度通つても新しい風物と新しい感慨にいつも自分を浸すのであつた。ここから東の方だけ言つても

程ヶ谷と戸塚の間の焼餅坂に権太坂

箱根旧街道

鈴川、松並木の左富士

この宇津の谷

こういう場所は殊にしみじみさせる。西の方には尚多いと言つた。

それに不思議なことはこの東海道には、京へ上るといふ目的意識が今もつて旅人に働き、泊り重ねて大津へ着くまでは緊張していて常にうれいものである。だが、大津へ着いた

ときには力が落ちる。自分たちのような用事もないものが京都へ上ったとて何になろう。

そこで、また、汽車で品川へ戻り、そこから道中すしちゆうく双六のように一足一足、上りに向つて足を踏み出すのである。何の為めに？ 目的を持つ為めに。これを近頃の言葉では何とこののでしようか。憧憬、なるほど、その憧憬を作る為めに。

自分が再々家を空けるので、妻は愛想を尽かしたのも無理はない。妻は子供を連れたまま実家へ引取つた。実家は熱田附近だがそう困る家でもないので、心配はしないようなものの、さすが流石にときどきは子供に学費ぐらひは送つてやらなければならぬ。

作樂井は器用な男だったので、表具やちよつとした建具左官の仕事は出来る。自分で襖ふすまを張り替えてそれに書や画もかく。こんなことを生なりわい業として宿々に知り合いが出来るとなおこの街道から脱けられなくなり、家を離散さしてから二十年近くも東海道を住家として上り下りしていると語つた。

「こういう人間は私一人じゃありませんよ。お仲間がだいぶありますね」
やがて

「これから大井川あたりまでご一緒に連れ立って、奥さんを案内してあげたいんだが何しろ忘れて来た用事というのが壁の仕事でね、乾き工合もあるので、これから帰りましょう。

まあ、御主人がついてらっしゃれば、たいがいの様子はご存じですから」

私たちは簡単な食事をしたのち、作楽井と西と東に訣れた。暗い隧道がどこかに在ったように思う。

私たちはそれから峠を下った。軒の幅の広い脊の低い家が並んでいる岡部の宿へ出た。茶どきと見え青い茶が乾してあったり、茶師の赤銅色の裸体が燻んだ色の町に目立っていた。私たちは藤枝の宿で、熊谷蓮生坊が念仏を抵当に入れたというその相手の長者の邸跡が今は水田になっていて、早苗がやさしく風に吹かれているのを見に寄ったり、島田では作楽井の教えて呉れた川越しの蓮台を蔵している家を尋ねて、それを写生したりして、大井川の堤に出た。見晴らす広漠とした河原に石と砂との無限の展望。初夏の明るい陽射しも消し尽せぬ人間の憂愁の数々に思われる。堤が一髪を横たえたように見える。ここで名代なのは朝顔眼あきの松で、二本になっている。私たちはその夜、島田から汽車で東京へ帰った。

結婚後も主人は度々東海道へ出向いた中に私も二度ほど連れて行って貰った。

もうその時は私も形振は関わらず、ただ燻んでひやりと冷たいあの街道の空気に浸り度

い心が急せいた。私も街道に取憑とりつかれたのであるうか。そんなに寂さびれていながらあの街道には、蔭に賑やかなものが潜ひそんでいるようにも感じられた。

一度は藤川から出発し岡崎で藤吉郎の矢矧やはぎの橋を見物し、池鯉鮒ちりゅうの町はずれに在る八つ橋の古趾を探ねようというのであった。大根の花も莢さやになつてゐる時分であつた。

そこはやや湿地がかつた平野で、田圃たんぼと多少の高低のある沢地がだるく入り混つてゐた。畦川が流れていて、濁つた水に一ひらの板橋がかかつてゐた。悲しいくらい周囲は眼まなこを遮るものもない。土地より高く河が流れてゐるらしく、やや高い堤の上に点を打つたように枝葉を刈り込まれた松並木が見えるだけであつた。「ここを写生しとき給え」と主人が言うので、私は矢立を取出したが、標本的の画ばかり描いてゐる私にはこの自然も蒔絵まきえの模様のようにしか写されないので途中で止めてしまった。

三河と美濃の国境だという境橋を渡つて、道はだんだん丘陵の間に入り、この辺が桶おけは狭間ざまの古戦場だという田圃みちを通つた。戦場にしては案外狭く感じた。

鳴海なるみはもう名物の絞りを売つてゐる店は一軒しかない。並んでゐる邸宅風の家々はむかし鳴海絞りを売つて儲けた家だと俵夫しやぶが言った。池鯉鮒よりで気の付いたことには、家の造りが破風はふを前にして東京育ちの私には横を前にして建ててあるように見えた。主人は

「この辺から伊勢造りになるんです」

と言った。その日私たちは熱田から東京に帰った。

木枯しの身は竹齋に似たるかな

十一月も末だったので主人は東京を出がけに、こんな句を口誦くちずさんだ。それは何ですと私が訊くと

「東海道遍歴体小説の古いものの一つに竹齋物語というのがあるんだよ。竹齋というのは小説の主人公の藪医者の名さ。それを芭蕉が使つて吟じたのだな。確か芭蕉だと思った」

「では私たちは男竹齋に女竹齋ですか」

「まあ、そんなところだろう」

私たちの結婚も昂揚時代というものを見ないで、平々淡々の夫婦生活に入っていた。父はこのときもう死んでいた。

そのときの目的は鈴鹿を越してみようということであった。亀山まで汽車で来て、それから例の通り俥に乗った。枯桑の中に石垣の膚を聳そびえ立たしている亀山の城。関のさびれた町に入つて主人は作楽井が昨年話して呉れた古老を尋ね、話を聞きながらそこに持ち合

つている伊勢詣りの浅黄あさぎの脚絆きやはんや道中差しなど私に写生させた。福蔵寺に小まんの墓。関の小まんが米かす音は一里聞えて二里響く。

仇あだうち打の志があつた美女の小まんはまた大力でもあつたのでこういう唄が残っていると
いつた。

関の地藏尊に詣でて、私たちは峠にかかった。

満目 肅しゆくさつ 殺の氣に充ちて旅のうら寂しさが骨身に徹る。

「あれが野猿の声だ」

主人はにこにこして私に耳を傾けさせた。私はまたしてもこういうところへ来ると生々して来る主人を見て浦山うらやましくなつた。

「ありたけの魂をすつかり投げ出して、どうでもして下さいと言いたくなるような寂しさですね」

「この底に、ある力強いものがあるんだが、まあ君は女だからね」

小唄に残っている間あいの土山つちやまへひよっこり出る。屋根附の中風薬の金看板など見える小さな町だが、今までの寒山枯木に対して、血の通う人間に逢う歓びは覚える。

風が鳴っている三上山ふもとの麓ふもとを車行して、水無口から石部の宿を通る。なるほど此処ここの酒

店で、作楽井が言ったように杉の葉を玉に丸めてその下に旗を下げた看板を軒先に出している家がある。主人は仰いで「はあ、これが酒店のしるしだな」と言った。

琵琶湖の水が高い河になつて流れる下を隧道に掘つて通つてゐる道を過ぎて私たちは草津のうばが餅屋に駆け込んだ。硝子戸ガラスの中は茶釜ちやがまをかけた竈かまどの火で暖かく、窓の色硝子の光線をうけて鉢の金魚は鱗を七彩に閃めかしながら泳いでゐる。外を覗いてみると比良も比叡も遠く雪雲を冠つてゐる。

「この次は天津、次は京都で、作楽井に言わせると、もう東海道でも上りの憧憬の力が弱まつてゐる宿々だ」

主人は餅を食べながら笑つて言った。私は

「作楽井さんは、この頃でも何処かを歩いてらつしやるでしょうか、こういう寒空にも」と言つて、漂浪者の身の上を想つてみた。

それから二十年余り経つ。私は主人と一緒に名古屋へ行つた。主人はそこに出来た博物館の頼まれ仕事で、私はまた、その学校へ赴任してゐる主人の弟子の若い教師の新家庭を見舞うために。

その後の私たちの経過を述べると極めて平凡なものであった。主人は大学を出ると美術工芸学校やその他二三の勤め先が出来た上、類の少ない学問筋なので何やかや世間から相談をかけられることも多く、忙しいまま、東海道の行きは、間もなく中絶してしまった。ただときどき小夜の中山を越して日坂の蕨餅わらびもちを食ってみたいとか、御油、赤阪の間の松並木の街道を歩いてみたいとか、譚言うわごとのように言っていたが、その度もだんだん少なくなつて、最近では東海道にいくら縁のあるのは何か手の込んだ調べものがあると、蒲がまこ郡おりの旅館へ一週間か十日行つて、その間、必要品を整えるため急いで豊橋へ出てみるぐらいなものである。

私はまた、子供たちも出来てしまつてからは、それどころの話でなく、標本の写生も、別に女子美術出の人を雇つて貰つて、私はすっかり主婦の役に髪を振り乱してしまつた。ただ私が今も残念に思っていることは、絵は写すことばかりして、自分の思ったことが描けなかつたことである。子供の中の一人で音楽好きの男の子があるのを幸いに、これを作曲家に仕立てて、優劣は別としても兎に角、自分の胸から出るものを思うまま表現できる人間を一人作り度いと骨折たっているのである。

さてそんなことで、主人も私も東海道のことはすっかり忘れ果て、二人ともめいめいの

用向きに没頭して、名古屋での仕事もほぼ片付いた晩に私たちはホテルの部屋で番茶を取り寄せながら雑談していた。するとふと主人は、こんなことを言い出した。

「どうだ、二人で旅へ出ることも滅多にない。一日帰りを延して久し振りにどっか近くの東海道でも歩いてみようじゃないか」

私は、はじめ何をこの忙しい中に主人が言うのかと問題にしないつもりでいたが、考えてみると、もうこの先、いつの日に、いつまた来られる旅かと思うと、主人の言葉に動かされて来た。

「そうですね。じゃ、まあ、ほんとに久し振りに行ってみましょうか」

と答えた。そう言いかけていると私は初恋の話をするように身の内の熱くなるのを感じて来た。初恋もない身で、初恋の場所でもないところの想い出に向って、それは妙であった。私たちは翌朝汽車で桑名へ向うことにした。

朝、ホテルを出発しようとする、主人に訪問客があった。小松という名刺を見て主人は心当りがないらしく、ボーイにもう一度身元を聞かせた。するとボーイは

「何でもむかし東海道でよくお目にかかった作楽井の息子と云えばお判りでしょうと仰おつ

しやいますか」

主人は部屋へ通すように命じて私に言った。

「おい、むかしあの宇津で君も会ったろう。あの作楽井の息子だそうだ。苗字は違っているがね」

入って来たのは洋服の服装をきちんとした壮年の紳士であった。私は殆ど忘れて思い出せなかったが、あの作楽井氏の^{ひとなつ}人懐っこい眼元がこの紳士にもあるような気がした。紳士は丁寧に礼をして、自分がこの土地の鉄道関係の会社に勤めて技師をしているところから、昨晚、倶楽部へ行つてふと、亡父が死前に始終その名を口にしていたその人が先頃からこの地へ来てNホテルに泊つてゐることを聴いたので、早速訪ねて来た^{てんまつ}顛末を簡潔に述べた。小松というのは母方の実家の姓だと言つた。彼は次男なので、その方に子が無いまま実家の後を^つ嗣いだのであつた。

「すると作楽井さんは、もうお歿^なくなりになりましたか。それはそれは。だが、年齢から言つてもだいたいおなりだつたでしょうからな」

「はあ、生きておれば七十を越えますが、一昨年歿くなりました。七八年前まで元氣でおりました、相変らず東海道を往來しておりましたが、神経痛が出ましたので^{さすが}流石の父も、

我を折つて私の家へ落着きました」

小松技師の家は熱田に近い処に在った。そこからは腰の痛みの軽い日は、杖つえに縋すがりながらも、笠寺観音から、あの附近に断続して残っている低い家並に松株が挟まっている旧街道の面影を尋ねて歩いた。これが作楽井をして小田原から横浜市に移住した長男の家にかかるよりも熱田住みの次男の家へかからしめた理由なのであった。

「私もときどき父に附添つて歩くうちに、どうやら東海道の面白味を覚えました。この頃は休暇毎には必ず道筋のどこかへ出かけるようにしております」

小松技師は作楽井氏に就いているいろいろのことを話した。作楽井氏も晩年には東海道ではちよつと名の売れた画家になつて表具や建具仕事はしなくなったことや、私の主人に、まだその後街道筋で見付けた参考になりそうな事物を教えようとて作楽井氏が帳面につけたものがあるから、それをいずれば東京の方へ送り届けようということや、作楽井氏の腰の神経痛がひどくなつて床についてから同じ街道の漂泊人仲間を追憶したが、遂に終りをよくしたものが無い中にも、私の主人だけは狡くて、途中に街道から足を抜いたため、珍らしく出世したと述懐していたことやすべて主人を散々に苦笑させた。話はつい永くなつて十時頃になつてしまつた。

小松技師は帰りしなに、少し改つて

「実はお願いがあつて参りましたのですが」

と言つて、暫く黙つていたが、主人が気さくな顔をして応じているのを見て安心して言つた。

「私もいささかこの東海道を研究してみましたのですが、御承知の通り、こんなに自然の変化も都会や宿村の生活も、名所や旧蹟も、うまく配合されている道筋はあまり他にはないと思うのです。で、もしこれに手を加えて遺すべきものは遺し、新しく加うべき利便はこれを加えたなら、将来、見事な日本の一大観光道筋になろうと思います。この仕事はどうも私には荷が勝つた仕事ですが、いずれ勤先とも話がつきましたら専心この計画にかかつて私の生涯の事業にしたいと思ひますので」

その節は、亡父の誼よしみもあり、東海道愛好者としても呉くれぐれ々々も一臂いっぴの力を添えるよう主人に今から頼んで置くというのであつた。

主人が「及ばずながら」と引受けると、人懐っこい眼を輝かしながら頻しきりに感謝の言葉を述べるのであつた。そして、これから私たちの行先が桑名見物というのを聞取つて

「あすこなら、私よく存じている者もおりますから、御便宜になるよう直ぐ電話で申送つ

て置きましよう」

と言つて歸つて行つた。

小松技師が歸つたあと、しばらく腕組をして考えていた主人は、私に言った。

「憧憬という中身は変わらないが、親と子とはその求め方の方法が違って来るね。やっぱり時代だね」

主人のこの言葉によつて私は、二十何年前、作樂井氏が常に希望を持つために、憧憬を新らしくする為めに東海道を天津まで上つては、また、発足点へ戻つてこれを繰返すという話を思い出した。私は

「やっぱり血筋ですかね。それとも人間はそんなものでしょうか」と、言つた。

汽車の窓から伊勢路の山々が見え出した。冬近い野は農家の軒のまわりにも、田の畦あぜにも大根が一ぱい干されている。空は玻璃はりのように澄み切つて陽は照っている。

私は身体を車体に揺られながら自分のような平凡に過した半生の中にも二十年となれば何かその中に、大まかに脈をうつものが氣付かれるような氣のするのを感じていた。それ

はたいして縁もない他人の脈ともどこかで触れ合いながら。私は作楽井とその息子の時代と、私の父と私たちと私たちの息子の時代のことを考えながら急ぐ心もなく桑名に向っていった。主人は快げに居眠りをしている。少し見え出したつむじの白髪が弾ねて光る。

青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1993（平成5）年8月24日第1刷発行

底本の親本：「第六創作集『老妓抄』」中央公論社

1939（昭和14）年3月18日

初出：「新日本」

1938（昭和13）年8月号

入力：佐藤洋之

校正：高橋真也

1999年2月6日公開

2005年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

東海道五十三次

岡本かの子

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>